

池田市埋蔵文化財発掘調査概報

1991年度

1992年3月

池田市教育委員会

序 文

池田市は大阪府の北西部に位置し、猪名川の水の流れ、五月山の緑に囲まれています。このような自然の豊かな環境の中、先史の時代から人々が営み始めています。しかし、近年はこの地も、陸・空の交通の要衝として、また、大阪のベットタウンとして開発が進み、大きく発展してまいりました。

このような開発、発展とは裏腹に、我々の祖先が伝え残してきた文化や自然が破壊され、かつての面影がしのぶことができないほど様がわりてしまったことも事実です。祖先から受け継がれてきた文化遺産を現代生活に反映しつつ、また、後世の世代に伝えて行くことが我々の義務だと考えております。

この報告書は上述した状況の中、危機に面している埋蔵文化財について、国並びに大阪府の補助を受けて実施した発掘調査の概要報告であります。本書が文化財の理解に通じれば幸いと存じます。

なお、調査の実施にあたっては多くの御指示、御助言をいただいた諸先生並びに関係機関をはじめ、土地所有者、近隣住民の方々には文化財保護に対して格別の御理解と御協力をいただきました。心より感謝と敬意を表し、厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

池田市教育委員会
教育長 片山久男

例　　言

1. 本書は、池田市教育委員会が平成3年度国庫補助事業（総額1,000,000円、国庫50%、府費25%）として実施した埋蔵文化財緊急発掘調査の概要報告書である。

2. 本年度の調査および期間は下記のとおりである。

池田城跡23次　　池田市建石町3246-1、3247-3　　平成3年5月10日～17日

宮の前遺跡25次　　池田市石橋4丁目389-8　　平成3年5月21日

豊島南遺跡6次　　池田市豊島南1丁目349-1　　平成3年9月2日～7日

3. 調査は、池田市教育委員会教育部社会教育課文化財係が実施し、田上雅則、中西正和が現地を担当した。

4. 本書の執筆、編集は、中西が行った。また、本書の製図、遺物実測にあたっては村山倫弘、田辺哲朗、正岡克巳、芦田妙美の協力を得た。

5. 調査の進行にあたっては、施主並びに近隣住民の方々に深甚なる御理解、御協力をいただきいた。本筆でありますが、深く感謝いたします。

目 次

I. 歴史的環境	1
II. 池田城跡23次発掘調査	4
III. 宮の前遺跡25次発掘調査	8
IV. 豊島南遺跡 6次発掘調査	11

図 版

図版 1 (1) 池田城跡トレンチ全景 (南から)

(2) 同上断面

図版 2 (1) 宮の前遺跡トレンチ全景 (北から)

(2) 同上断面

図版 3 (1) 豊島南遺跡第1トレンチ全景 (西から)

(2) 同上第2トレンチ全景 (北から)

挿図目次

第1図 遺跡分布図	2
池田城跡23次発掘調査	
第2図 調査地位置図	4
第3図 トレンチ位置図	5
第4図 トレンチ平・断面図	6
第5図 出土遺物実測図	6
宮の前遺跡25次発掘調査	
第6図 調査地位置図	8
第7図 トレンチ位置図	9
第8図 トレンチ断面図	10
豊島南遺跡6次発掘調査	
第9図 調査地位置図	11
第10図 トレンチ位置図	12
第11図 第1トレンチ平・断面図	12
第12図 第2トレンチ平・断面図	13
第13図 出土遺物実測図	13

I. 歴史的環境

池田市は大阪府の北西部に位置し、南北9.2km、東西4.1kmの南北に細長い市域を有している。

池田市の地形はおおよそ北部の北摂山地、北摂山地を源とする余野川が形成した木部・古江地区に広がる沖積平野、中央部には五月山山塊及び南に広がる台地、南部には猪名川によって形成された沖積平野がひろがっている。このような自然環境の中、人々は旧石器時代から生活を営んでいたことが、近年の発掘調査で明らかにされている。

今回発掘調査を実施した宮の前遺跡、豊島南遺跡は南部台地南辺部、池田城跡は五月山山塊の南に広がる台地に位置する遺跡である。

旧石器時代 現在のところ旧石器時代の遺物が出土した遺跡としては、伊居太神社参道遺跡と宮の前遺跡（螢池北遺跡）が挙げられる。伊居太神社参道遺跡は標高約50mの五月山山塊西端部に位置する。採集された石器の中に少量ではあるがナイフ形石器、尖頭器等の旧石器時代に比定されるものが認められている。また、宮の前遺跡では1986年の大阪府教育委員会による調査で府国型ナイフ形石器が1点出土している。

縄文時代 五月山山塊に位置する遺跡としては、上記した伊居太神社参道遺跡のほかに、京中遺跡では石鏃、石匕が、畑有舌尖頭器出土地ではサヌカイト製の尖頭器が、そして、池田城跡下層からは晩期の生駒西麓産空蒂文土器が出土している。また、南部の台地では、神田北遺跡で石鏃、石匕が、宮の前遺跡で石棒、豊島南遺跡で後期から晩期の土器が出土している。

弥生時代 弥生時代に入ると広範囲に遺跡が分布する。前期に関する遺跡は現在のところ木部遺跡だけである。当遺跡は本格的な調査がされていないので詳細は不明であるが、池田市内では唯一弥生時代全般を通じて営まれた遺跡である。中期に入ると猪名川に隣接する台地上に位置する遺跡が営まれるようになる。宮の前遺跡は中国縦貫自動車道建設に伴い調査され、方形周溝墓、竪穴式住居跡、土壤墓等が検出された。また、宮の前遺跡から西へ約1kmに位置する豊島南遺跡から方形周溝墓2基が検出され、宮の前遺跡との関連が注目される。後期に入ると、宮の前遺跡、豊島南遺跡は消滅し、かわって、丘陵上に位置する鼓ヶ滝遺跡、京中遺跡、愛宕神社遺跡等の遺跡が現れ、台地では神田北遺跡が現れる。全体的に後期に入ると集落は各地に散らばり、小規模化する。

古墳時代 池田市内の前期古墳は共に竪穴式石室を有する娘三堂古墳と池田茶臼山古墳がある。娘三堂古墳は五月山中腹に位置し、画文帯神獸鏡が出土した円墳で、池田茶臼山古墳は五月山山塊の鞍部に築造された前方後円墳である。中期では高塚式の古墳はなくなり、かわって、低墳丘古墳が宮の前遺跡、豊島南遺跡で見られるようになる。後期では善海1・2号墳・木部1・2号墳、木部桃山古墳、須恵質の陶棺が検出された五月ヶ丘古墳等のような単独、あるいは2~3基を一単位とする小規模な古墳が現れるが、群集墳は形成されない。しかし、後期古



- | | | | |
|------------|---------------|---------------|----------------|
| 1. 足ヶ瀬遺跡 | 2. 古江古墳 | 3. 古江北古墳 | 4. 吉田遺跡 |
| 5. 吉江遺跡 | 6. 木部遺跡 | 7. 木部1号墳 | 8. 木部2号墳 |
| 9. 木部桃山古墳 | 10. 爰宕神社遺跡 | 11. 伊沼太神社多道遺跡 | 12. 桃三堂古墳 |
| 13. 舟三堂南古墳 | 14. 遠田城跡 | 15. 遠田茶臼山古墳 | 16. 五月ヶ丘古墳 |
| 17. 林原北遺跡 | 18. 霧海1号墳 | 19. 霧海2号墳 | 20. 石横櫻寺 |
| 21. 新緑西遺跡 | 22. 湖有吉矢頭森山古墳 | 23. 京中遺跡 | 24. 夏羽惟遺跡 |
| 25. 野折塚古墳 | 26. 林原古墳 | 27. 仲原南遺跡 | 28. 鳥原古墳 |
| 29. 石橋古墳 | 30. 二子塚古墳 | 31. 横城寺遺跡 | 32. 宇保塚名津彦神社古墳 |
| 33. 宇保遺跡 | 34. 神田北遺跡 | 35. 橋塚古墳 | 36. 丹門遺跡 |
| 37. 神田南遺跡 | 38. 天神遺跡 | 39. 豊島南遺跡 | 40. 往吉宮の前遺跡 |
| 41. 富の前遺跡 | 42. 神原山遺跡 | | |

第1図 遺跡分布図

墳の中でも巨大な横穴式石室を有する鉢塚古墳や前方後円墳の二子塚古墳は他の古墳とは異にしている。集落遺跡としては、神田北遺跡、木部遺跡等で須恵器や土師器が出土しているが、遺構は確認されていない。しかし、宮の前遺跡では古墳時代後期の竪穴式住居跡が検出されており、また、豊島南遺跡では古墳時代後期の竪穴式住居跡、溝が検出され、昨年の調査において古墳時代前期の焼失住居跡が検出されている。

歴史時代 西国街道沿いに隣接する宮の前遺跡や豊島南遺跡では奈良時代の郡衙的な役割を担ったと思われる建物跡が検出されている。また、寺院跡としては白鳳・天平時代の瓦が採取された石積庵寺や、時代は新しくなるが応仁の乱によって焼亡したとされる禪城寺遺跡がある。

古代末期から中世にかけて池田の地は後白河院領として呉庭荘の開発が推進され、後白河院から離れた後も勢力を保ちつつ当地域の政治、交流の中心地として栄える。そのころのものとして、神田北遺跡では11世紀の黒色土器、豊島南遺跡では13世紀の瓦器碗が検出されている。しかし、室町時代以後は国人池田氏の台頭により衰退し、池田氏が政治、文化の中心を握る。池田氏の居館池田城は五月山の南麓に位置し、現在でも土塁や空堀が良好に残る。1968・69年に一部主郭部が調査された際、礎石を伴う建物跡や枯山水様の庭園跡が検出され、また、1989年からの調査では虎口、建物跡、小規模な石垣、内堀等を確認している。

参考文献

- 富田好久「考古学上に現れた池田」『新版池田市史概説篇』 1971年
橋高和明ほか「原始・古代の池田」池田市立池田中学校地歴部 1985年

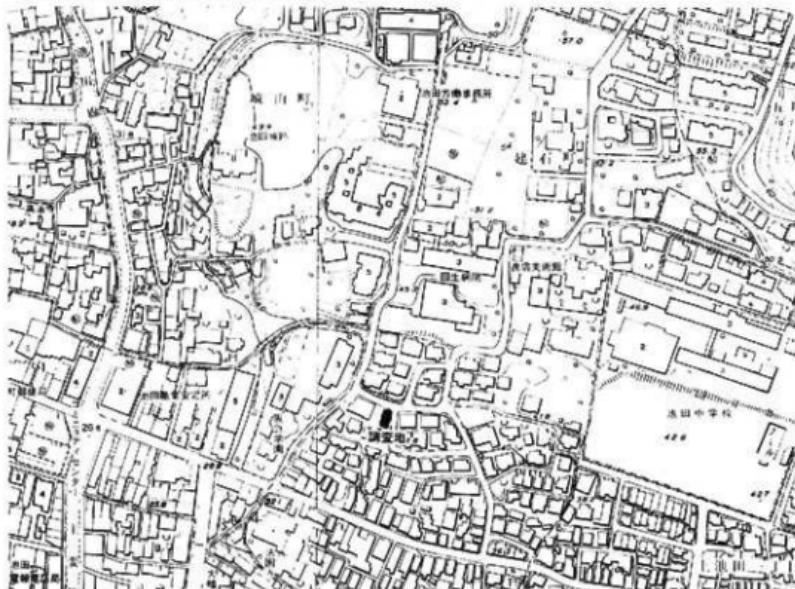
II. 池田城跡第23次調査

はじめに

池田城跡は、池田市城山町、建石町一帯に広がり、五月山から張り出した標高約50mの台地上に位置する。その台地は、池田・川西地方を眼下におくことができ、また、丹波山地から大阪湾に流れ込む猪名川に接し、京都から西国へ通じる西国街道、大阪から能勢地方へ通じる能勢街道も一望できる場所に位置し、当時の交通の要衝に適地されている。

池田城は国人池田氏の居館として構成された中世城郭で、正確な築城年代は明らかではないが、建武年間に築かれたとされる。その後、応仁の乱の戦功で領土を得ると共に、高利貸経営をも行い、池田氏は高利貸資本家の性格も持っていた。

池田城は幾度もの落城と復興を繰り返しつつも勢力を維持した。しかし、戦国時代に入ると、池田城は織田信長の摂津支配最大の要衝に挙げられ、永禄11（1568）年に攻撃され、その結果第九代城主池田勝正は信長に屈したが、本領安堵を得、そして、伊丹城の伊丹氏、芥川城の和田氏とともに摂津守護職に任じられた。しかし、その後、徐々に勢力を増して来た元家臣の荒木村重によって城は奪われる。村重は摂津守護に任じられ、天正2（1574）年伊丹城に入城した契機に池田城は廃城したとされる。



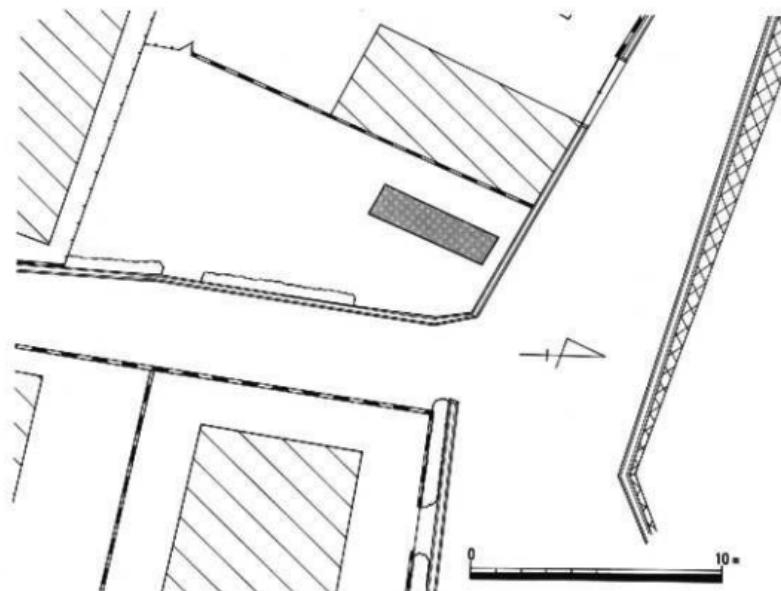
第2図 調査地位置図

池田城跡は現在でも主郭部東側に土塁と空堀が良好に残り、当時の面影が少しほ分かるが、城全体の構造について不明な点が多く残っていた。しかし、1968・69年に主郭部の一部が調査され建物跡に伴う礎石、石組の溝、中世城郭では珍しい枯山水様の庭園跡、落城に伴う焼土層等が検出され、1989年から実施された調査では排水のための暗渠を伴う虎口、建物跡に伴う礎石、石組の溝、小規模な石垣、内堀等が検出された。一方、主郭部外では主郭部の南方約100mの位置で大手口が存在することや空堀が巡らされていることが判明しており、少しづつではあるが城の全容が解明しつつある。また、池田城以前の時代についても明らかになりつつあり、1985年の大阪府教育委員会による調査では縄文時代晚期の土坑や土器、弥生時代後期の竪穴式住居跡、古墳時代後期の木棺直葬墳が検出され、1991年の池田市教育委員会による調査では、弥生時代末期の火災をうけたと思われる竪穴式住居跡を検出している。

参考文献

今谷明「国人層の台頭」「大阪府史」第4巻中世編II 1981年

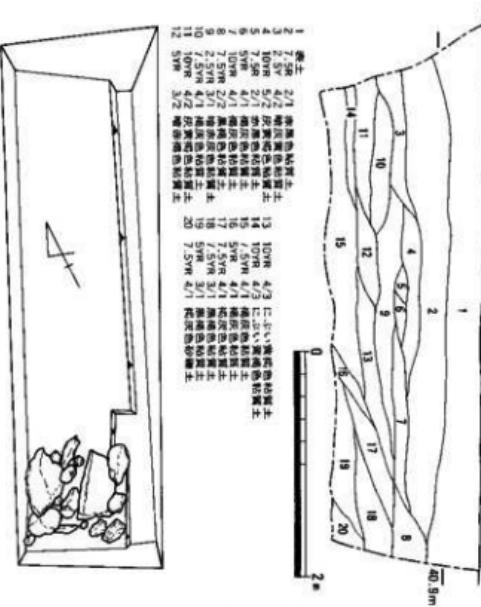
橋高和明ほか「原始・古代の池田」池田市立池田中学校歴部 1985年



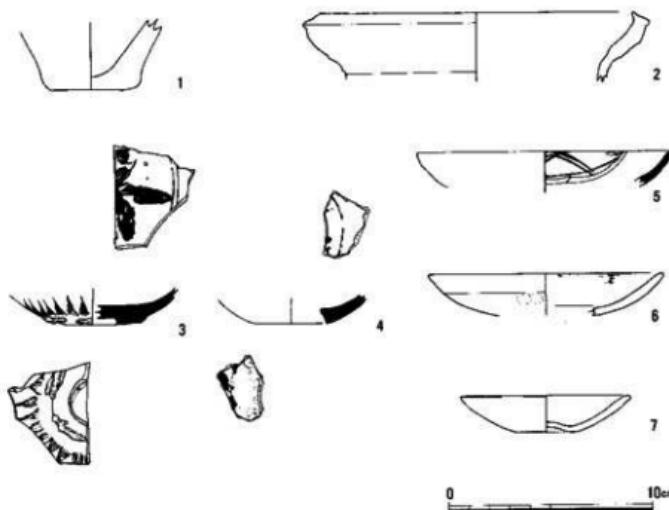
第3図 トレンチ位置図

調査の概要 調査地は池田市建石町3246-1、3247-3に位置し、住宅改築の事前調査として実施した。当調査は1983年の調査から堀が西から東へ存在する可能性があるところである。

層位は表土以下の土層は南から北へ傾斜しており、堀の埋土中を掘削したと思われる。土層は傾斜はすべて緩やかで、堀の肩には達しておらず、北堀の土層では、堀の立ち上がりを確認していないため、堀は幅広いものと思われる。また、トレーンチ南端において石列を確認したが堀との境を示したものとも考えられる。



第4図 トレーンチ平断面図



第5図 出土遺物実測図

出土遺物 遺物はすべて堀の埋土から出土した。(1)は弥生土器甕の底部で第V様式と考えられる。(2)は土師質の釜の口縁で、段をもちながら外反し口縁部で中に入る。(3)～(5)は磁器で、(3)、(4)はいわゆる基筒底の中国製薬付皿である、(3)は内面の罫線は2条走り、見込にはねじ花を描き、また、外面には芭蕉葉文を描く。(4)は外内面とも1条の罫線が走り、見込、外面には文を描くが、小片のため不明である。(3)の底部には砂目が残る。(5)は伊万里碗である。(6)、(7)は土師皿で(6)の口縁内部にスス痕が認められる。

III. 宮の前遺跡第25次調査

はじめに

宮の前遺跡は池田市石橋4丁目、住吉1・2丁目、豊中市螢池北町に広がる弥生時代から中世に至る複合遺跡で、待兼山の丘陵より西方へ発達した標高約30mの洪積台地に立地している。

周辺の遺跡としては、西方に第IV章で挙げる豊島南遺跡、弥生土器、須恵器が採取された住吉宮の前遺跡が位置し、東方に高地性集落と考えられる待兼山遺跡、須恵器、瓦を生産した桜井谷古窯跡群が広がり、また、南方に当遺跡と同一の性格を有する螢池北遺跡、7世紀の掘立柱建物跡が検出された螢池東遺跡、国府型ナイフ形石器が出土した螢池西遺跡等が挙げられる。

当遺跡は、昭和の初頭に地元の人々により石器や土器などが採取され、世に知られていたが、本格的な調査が行われたのは1968・69年の中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査が最初で、そ

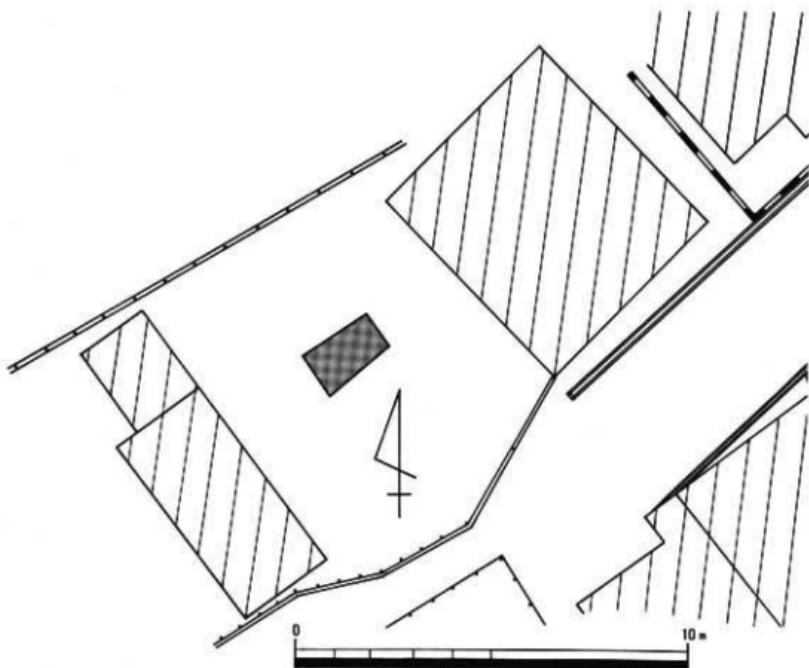


第6図 調査地位置図

の結果、当時発見されて間もない弥生時代中期の方形周溝墓、竪穴式住居跡、木棺墓を含む土壙墓、古墳時代の竪穴式住居跡、低墳丘墓、土壙墓、奈良時代の掘立柱建物跡、井戸、平安時代の掘立柱建物跡等が確認され、墓域と居住域が同時に把握できる遺跡として注目された。以後、開発による事前調査によって方形周溝墓、竪穴式住居跡等が検出され、遺跡の範囲も拡大している。また、1986年の大阪府教育委員会による調査、1989年の豊中市教育委員会による調査で、国府型ナイフ形石器が検出され¹⁾、当遺跡が旧石器時代までさかのぼることが判明した。

註 (1) 豊中市教育委員会『箕池北遺跡現地説明会資料』1989年

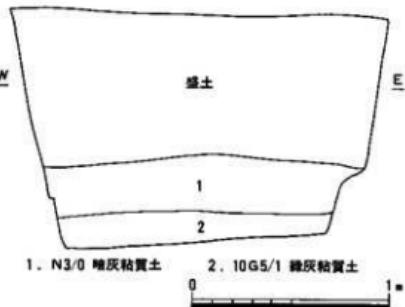
調査の概要 調査地は池田市石橋4丁目389-8に位置し、個人住宅の新築に伴う事前調査として実施した。本調査地は遺跡が位置する台地の北端に位置する。台地の北端は余り調査されておらず、今回は上層確認を主眼においた。



第7図 トレンチ位置図

層序は4層からなり、第1層は盛土、
第2層は暗灰粘質土(耕作土)、第3層は
緑灰粘質土(床土)、第4層は明青灰粘質
土の地山である。

遺構、遺物は検出されなかつたが、地
山は一連の宮の前遺跡の地山であり、遺
構が付近にあることが推定される。



第8図 トレンチ断面図

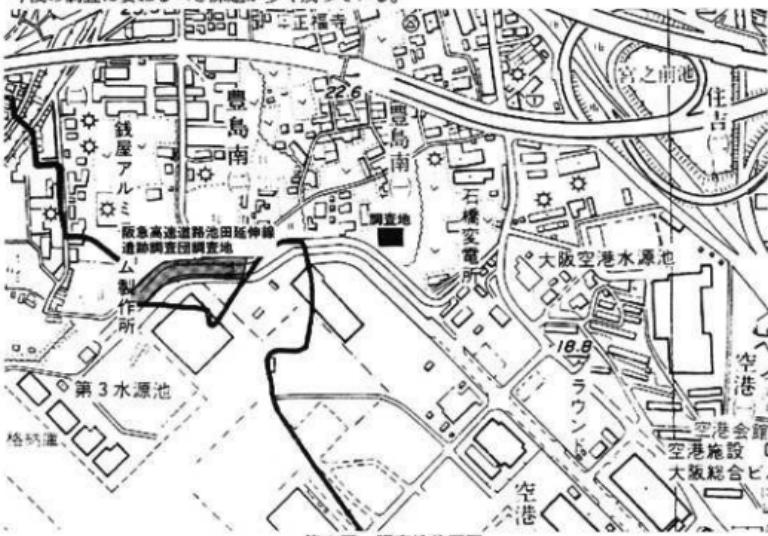
IV. 豊島南遺跡第6次調査

はじめに

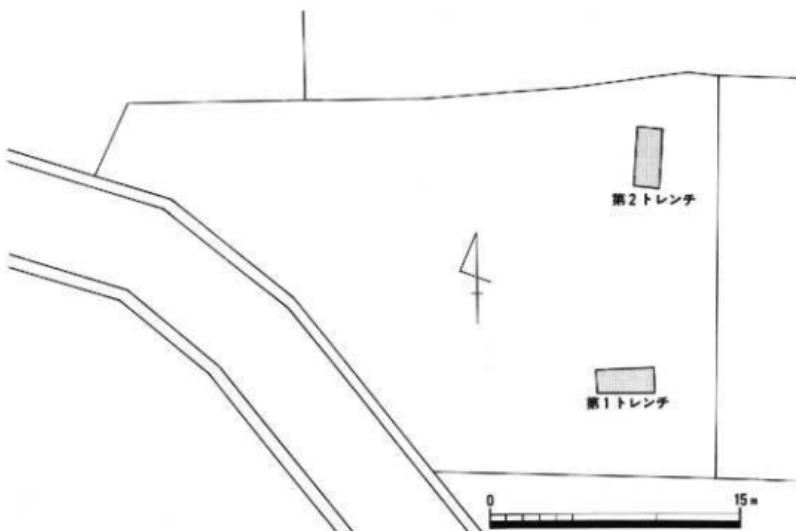
豊島南遺跡は池田市の南端、豊島南2丁目一带に広がり、西方約800mに猪名川、北方約500mに箕面川を臨む東から西へ緩やかに傾斜する標高約20mの段丘の西端部に位置している。

隣接する遺跡としては、東方に第III章で挙げた宮の前遺跡、弥生土器や須恵器が採取された住吉宮の前遺跡、南方に縄文時代中期の遺跡である大阪空港A遺跡、弥生時代における猪名川流域の代表的な遺跡である田能遺跡があり、縄文時代からの遺跡が多く存在する。

豊島南遺跡は、1980・81年に池田市教育委員会が実施した分布調査で、須恵器片等が採取されたことにより古墳時代を中心とする遺跡であると確認された。以後、1985年の大阪府教育委員会による調査では弥生時代後期の溝や中世の溝等が検出され、当遺跡は弥生時代まさかのほる遺跡であることが明らかになった。また、1987年から実施した阪神高速道路池田延伸線工事に伴う調査では縄文時代後期、晩期の土器片、弥生時代中期の方形周溝墓、庄内期の竪穴式住居跡、布留期の火災を受けた跡がある竪穴式住居跡、古墳時代中期の方墳、同時代後期の竪穴式住居跡、溝、奈良時代と考えられる掘立柱建物跡、中世の溝等が検出され、当遺跡は縄文時代から続く遺跡であると判明した。以上のような重要な資料を検出したものの、当遺跡は発見されてからまだ日は浅く、また、宮の前遺跡等の隣接する遺跡との関係についても不明で、今後の調査に委ねるべき課題が多く残っている。



第9図 調査地位置図



第10図 トレンチ位置図

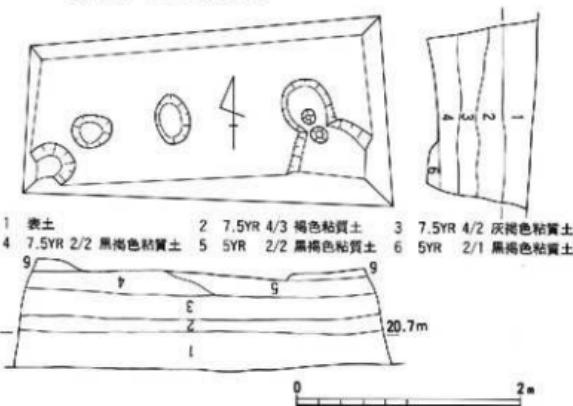
調査の概要 調査地は池田市豊島南1丁目349-1に位置する。個人住宅の新築に伴う事前調査として実施した。

本調査地の東側に隣接する第3次調査地では、古墳時代から平安時代を中心とする3面の遺構面および、遺物包含層を確認しており、西へ広がっているものと予想された

ため、小規模ながら包含層確認のためのトレンチを2箇所設定し、調査を行った。

第1トレンチ 調査地南部に設定したトレンチで規模は 2×4 mである。層序は5層からなり、第1層は耕土、第2層は褐色粘質土、第3層は灰褐色粘質土で、古墳時代を中心とする遺物を含む包含層である。第4層は黒褐色粘質土、第5層は黒褐色粘質土の地山である。

検出した遺構はピット、杭跡、土坑である。ピットは柱痕が確認できず、また、掘立柱建物跡に伴うものとは考えられない。土坑の深さは10cmと浅く、トレンチの外に延びているため性



第11図 第1トレンチ平・断面図

格等は不明である。

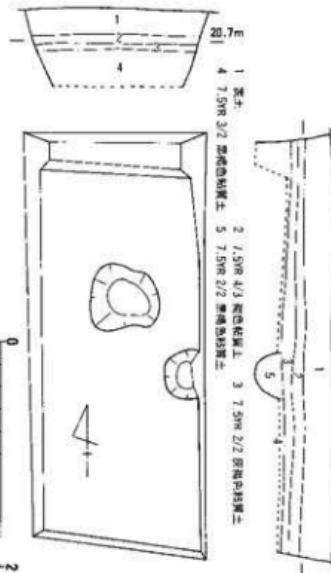
第2トレンチ 調査地北部に設定したトレンチで規模は $2 \times 4\text{ m}$ である。層序は4層からなり、第1層は耕土、第2層は褐色粘質土、第3層は灰褐色粘質土、第4層は黒褐色粘質土の地山である。第1層～第3層と地山は第1トレンチと同じであるが、第2トレンチでは第1トレンチの第4層がなくなる。

検出した遺構はピット2基で、2基とも柱痕は確認できなかった。

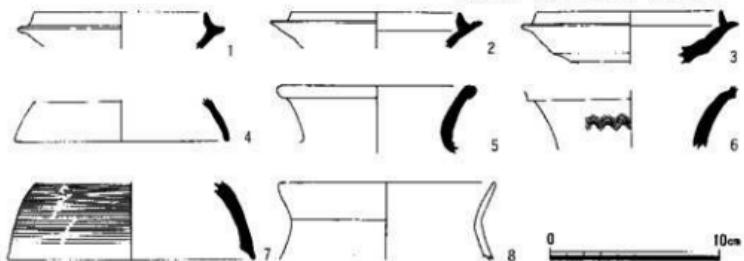
出土遺物 第1トレンチ、第2トレンチの第3層からコンテナ1箱分の須恵器、土師器が出士したがすべて小片であった。

第1トレンチ (1)、(2)、(3)は須恵器の杯で、口径は(1)10.2cm、(2)10.0cm、(3)11.0cmと均衡している、また、(1)は天井部において回転ヘラケズリを施しているが、(2)、(3)は残存するところではみられない。(4)は須恵器の蓋杯で、天井端部に後とうよりは1条の沈線を巡らしており、口径は12.6cmである。(5)は甕の口縁でやや丸みを帯びながら外反する。口縁は平坦で、口縁部の端は丸みを帯びる。

第2トレンチ (6)は須恵器の大型甕の口縁部で、外反する口縁は上部で段をなしており、また、波状文を施している。(7)は須恵器の脚部と思われ、外面にカキメを施している。(8)は土師器の甕で外内面とも摩滅著しく調整は不明である。



第12図 第2トレンチ平断面図



第13図 出土遺物実測図 (1～5第1トレンチ、6～8第2トレンチ)



(1) トレンチ全景（南から）



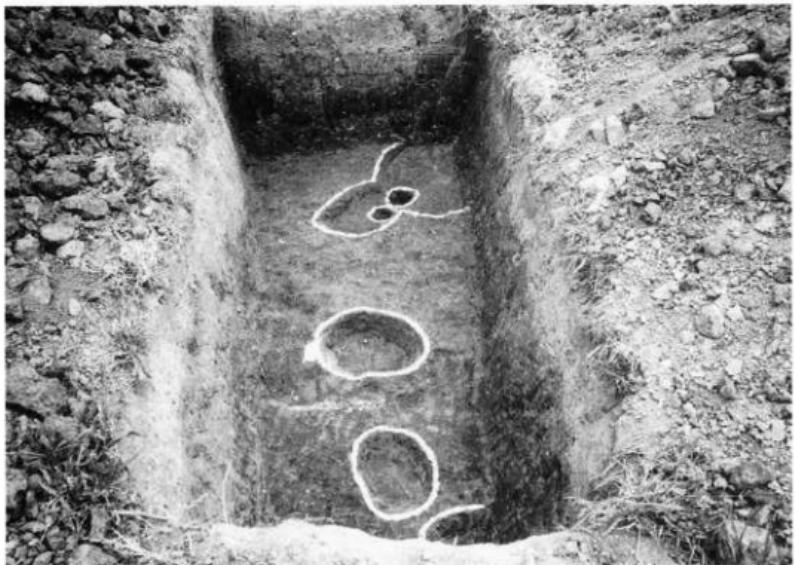
(2) トレンチ断面



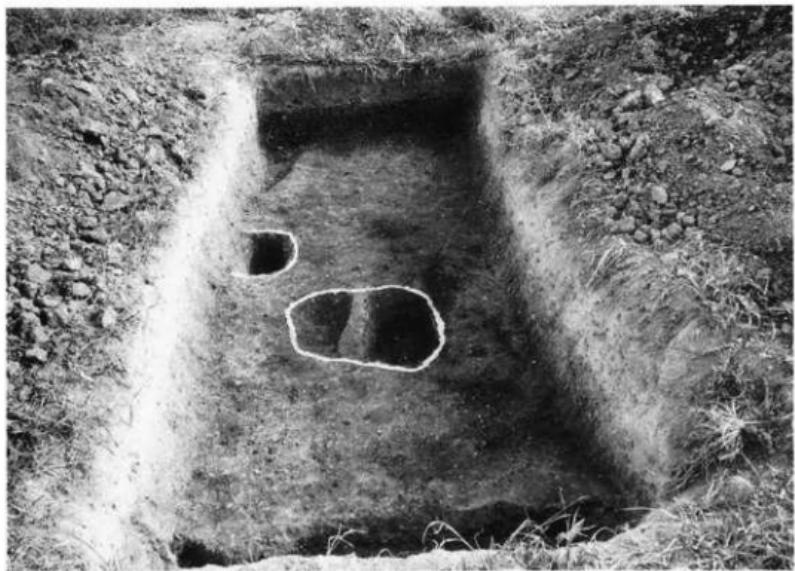
(1) トレンチ全景（北から）



(2) トレンチ断面



(1) 第1トレンチ全景（西から）



(2) 第2トレンチ全景（北から）



池田市文化財調査報告第16集
池田市埋蔵文化財発掘調査概報
1991年度
1992年3月
発行 池田市教育委員会
池田市城南1-1-1
編集 社会教育課 文化財係
印刷 やまかつ株式会社